

問題1

①～⑧のくずし字(変体仮名)を読んでみよう。

ありはとらふさきうろろはかたふり
例

①
 ②
 し
 お
 と
 こ
 有あり
例けり。
 その
 お
 と
 ③
 身
 を

④
 ⑤
 ⑥
 う
 な
 き
 物
 に
 お
 も
 ひ

④
 ⑤
 ⑥
 ⑦
 ⑧
 して、
 京
 に
 は
 あ
 ら
 じ、

⑥
 ⑦
 ⑧
 東
 乃
 じ
 ぬ
 ら
 せ
 る
 べ
 き
 と
 て
 き
 け
 り。

東
 ⑥
 か
 た
 に
 ⑦
 む
 べ
 き、
 と
 て
 ⑧
 き
 け
 り。

↓この作品は

『
』

のパロディ 『仁勢物語』
にせものがたり

問題2

⑨～⑫のくずし字ともの漢字(字母)を埋めてみよう。

★(続き) つれとする人。ひとりふたり行けり。みちしれる人もなくて。

と
ふ
て
ゆ
き
り
三
河
国
を
か
さ
⑩

| | |
|---|---|
| 止 | と |
| 不 | ふ |
| 天 | て |
| 由 | ゆ |
| 幾 | き |
| | ⑨ |
| 利 | り |
| | 三 |
| | 河 |
| | 国 |
| 遠 | を |
| 可 | か |
| 左 | さ |
| | ⑩ |

と
ふ
て
ゆ
き
り
三
河
国
を
か
さ
⑪
⑫

| | |
|---|---|
| 止 | と |
| 以 | い |
| 不 | ふ |
| 止 | と |
| 己 | こ |
| 呂 | ろ |
| | ⑪ |
| 以 | い |
| 多 | た |
| | ⑫ |
| 奴 | ぬ |

年
組
番
名前

問題3

⑬～⑳のくずし字(変体仮名)を読み、空欄Aを埋めてみよう。

★(続き)

そこをおかさきとは、ちやうりあるによりてなむ。おかさきとおもひける、

そのやとの家にたちよりて、はたごめしくひけり。そのたなに

いとおほくありけり。それをみて、つれ人、

「A、といふ五もじを、くのかみにすへて、たびのころをよめ。」

と、いひければよめる。

からんち哉 ⑬

とよふも若ふも ⑭

はまこせしちて ⑮ ⑯

| | | |
|---|---|---|
| | | か |
| | き | ち |
| ⑮ | の | み |
| ⑯ | ふ | ち |
| だ | も | ⑬ |
| ち | ⑭ | |
| て | ふ | |
| | も | |

問題 4ii

この狂歌に使われている修辞法（歌の技法）は何でしょう？

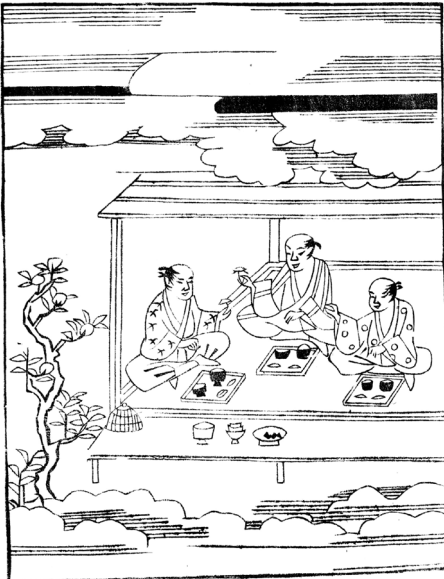
空欄 A は

問題 4i

★（続き）とよめりければ、みな人わらひにけり。

17
 魚先がしらぬのなる
19

20
 さらさらきりぎりす



| | |
|--|--|
| 19 | 17 |
| | |
| 20 | 18 |
| を | ぐ |
| | |
| し | り |
| | |
| ぞ | ま |
| | |
| お | は |
| | |
| も | る |
| | |
| ふ | |

年
組
番
名
前

解答

問題 1 .. ①お(於) ②か(可)、③こ(古)、④系(恵)、

⑤な(奈)、⑥の(乃)、⑦す(春)、⑧ゆ(遊)。

「おかし、男有りけり。その男、身をえうなき物に思ひなして、京にはあらず、東のかたにすむべき、とて、ゆきけり。」

↓この作品は『伊勢物語』のパロディ 『仁勢物語』
がたり「語」

問題 2 .. ⑨け・介(个)、⑩き・起、⑪に・丹、⑫り・里。

問題 3 .. ⑬を(越)、⑭け(希)、⑮つ(徒)、⑯れ(連)、

⑰へ(遍)、⑱め(免)、⑲た(堂)、⑳び(飛)。

「かちみちを／きのふもけふも／つれだちて／へめぐりまはる／たびをしぞおもふ」

問題 4 i .. かきつへた(柿つ帯)。

問題 4 ii .. 折句(おりく)。

教材について

ねらい .. くずし字を学びながら、古典の知識を踏まえた文学を、娯楽として楽しむという江戸時代の様子を知る。

時間配分: トータル45分。授業時間: 5分(くずし字の説明)

+ 20分(問題1・2) + 20分(問題3・4)。

対象教科: 国語、書写・書道

問題解説

今回扱うのは『伊勢物語』を逐語的にもじった江戸時代のパロディ文学『仁勢物語』です。「もじり」とは「文芸上では、同音または音の近い他の語意のことばに言い換えること、日本語に多い同音異義語を使う言語遊戯の一種の地口、語呂ごろなどを言い、有名な詩文や歌謡などの文言や調子を真似て笑わせる」(武藤禎夫『もじり百人一首を読む』東京堂出版、一九九八年参照)というもので(地口はしやれとほぼ同意)、『伊勢物語』原文の音を残しつつ、平安時代の「雅」を江戸時代の「俗」に当世化したのが本作品です。

問題 1 例として示した「け(遣)」のように、①は於

をくずした「お」で、これは現代のかなと同じ字母です。

②は可をくずした「か」を一覧表から探せましたか。勘のよい回答者は、ピンとくるかもしれませんね。③は「こ(古)」で、漢字の形が少し残った字体です。④は現代で

も使用される「ゑ(恵)」、「ゑうなし」は「役に立たない、必要でない」などの意です。⑤の「な(奈)」は現代の文字と字母は同じです。これも漢字の名残が強い字体ですね。⑥「の(乃)」も同様、現代と同じ字母ですが、ほぼもとの漢字の形を残しています。⑦「す(春)」は頻出の変体仮名です。「は(者)」と間違えやすいので注意が必要です。⑧「ゆ(遊)」は頻出とは言えませんが、昔の本ではたまに見かける字体です。通して読むと、「お

かし、男有りけり。その男、身をゑうなき物に思ひなして、京にはあらし、東のかたにすむべき、とて、ゆきけり」となります。もしかすると、「読んだことある!」と思つて、『伊勢物語』と勘違いした人もいたかもしれません。が、実は違います。本作は『仁勢物語』という江戸時代に出版された『伊勢物語』のパロディです。『伊勢物語』の冒頭文で有名な「昔、男ありけり」をもじった「おかし、男有りけり」ともじっているのです。

では原作の『伊勢物語』と比較してみましょう。原作には「昔、男ありけり。その男、身を要なきものに思ひなして、京にはあらし、東の方に住むべき国求めに」と

て行きけり。」とあります。「むかし」を「おかし」とするほか、「国求めに」の箇所が省かれています。が、原作をほぼなぞっていることがわかります。

問題2

⑨～⑫の⑨は「け・介(介)」、通して読むと「とふてゆきけり」です。この箇所は問題1の続きで、連れを一人二人伴つて東下りあづくだをしているところです。道を知る人がないので、尋ねながら進むわけです。⑩は「き・起」、⑪は「に・丹」、⑫は「り・里」で、通して読むと「三河国をかざきといふところにいたりぬ」となります。つまり今の愛知県岡崎市ですね。現代では「お」と「を」は分けて使われますが、江戸時代では音が合っていればよかったのか、「をかざき」のような書き方は珍しくありません。

原作『伊勢物語』はどうでしょうか。「もとより友とする人、一人二人して行きけり。道知れる人もなくて、惑ひ行きけり。三河の国、八橋といふ所にいたりぬ。」となっております。原作では名所の八橋ちりゅうし(知立市)に到るところを、『仁勢物語』では岡崎へと変更しているわけですね。

問題3

そして岡崎に到った一行は宿で旅籠飯はたごめしを食べます。するとその棚にたくさんの「柿かきつへた」がありました。本文に「茶売り」とあるので、柿の葉のお茶を作っていたのでしょうか。そこで一行は「かきつへた」の五文字を句の頭にして旅の心を詠むことを提案します。その歌が**問題3**となります。⑬は越が字母の「を」です。名字に越智さんとかいますね。その越が「を」になります。⑭は「け(希)」です。希は現代でも「希有(けう)」と読みだりしますね。⑮は「つ(徒)」、⑯は「れ(連)」です。⑰と⑱は江戸時代の書物によく出てくる文字です。⑰は「へ(遍)」、⑱は「め(免)」となります。⑲は「た(堂)」です。現代では「どう」と読むため、覚えにくい変体仮名の一つです。⑳は「び(飛)」です。歌全体を通して読むと、「かちみちを／きのふもけふも／つれだちて／へめぐりまはる／たびをしぞおもふ」となります。「かちみち(徒道)」は徒歩で旅すること、「へめぐる(経巡る)」も方々を旅することです。徒歩で昨日も今日も連れだつて旅をし、いろいろな場所を回るこの旅を思う、というような意味ですね(意味があるようなないような…)。

問題4

この句の面白いところは、「かきつへた」の五文字が句の頭に詠み込まれている点です。(か)ちみちを(き)のふもけふも(つ)れだちて(へ)めぐりまはる(た)びをしぞおもふ(た)。したがって、①の空欄Aに入る文字は「かきつへた」。これは柿のへたの意味の「柿かきつへた」で、「つ」は格助詞で現代の「の」と同じ働きをします。「まつ毛」は目(ま)の毛と考えるとわかりやすいかもしれませんが(目は目の当またりと言またりしますね)。

これももちろん、『伊勢物語』『東下り』のパロディです。「東下り」では八橋に通りかかり、愛知県の梶の花でもある杜若(かきつばた)が趣深く咲いていたので、「(か)らころも(き)つつなれにし(つ)ましあれば(は)るばるきぬる(た)びをしぞおもふ」と「かきつばた」の五文字を句の頭にすえて和歌が詠まれました。大変風流な和歌ですが、『仁勢物語』ではその「かきつばた」を、たまたま棚にあり、音が似ている「かきつへた」へと変えて狂歌を詠み、皆で大笑いしたという展開になっています。ちなみに、161頁の挿絵では中央の人物が柿のへたを持って笑う様子が描かれています。

このように、『仁勢物語』は『伊勢物語』の原文をもじりながら、風流な表現を俗に改めているわけです。『伊勢物語』を読んだことがある人々からすれば、原作の雅な文章が絶妙に俗な表現へと変えられ、ばかばかしい笑いが起こるわけです。しかし、原作の体裁は徹底的に真似されています。「かきつへた」の狂歌も原作「かきつばた」のように句の頭に五字を置く手法は踏襲されています。この和歌の技法を「折句おれく」と言います。『伊勢物語』を扱った時にも学習したと思いますので覚えておきましょう。

教材解説

『仁勢物語』の「仁勢」は、『伊勢物語』にそっくりという意味の「似にせ」と、ペテンとしての「偽にせ」の両義が込められている（藤原英城『伊勢物語』から『料理物語』『仁勢物語』へ）、母利可朗編『和食文芸入門』臨川書店（二〇二〇年）とも評されます。『仁勢物語』の版本研究（渡辺守邦『近世文学資料類従 仮名草子編』第二六巻、一九七七年）によりますと、『仁勢物語』は第一次整版本せいほんほんから第三次整版本の諸本があり、例えば第一次版は寛永六年

（二六二九）刊の版本『伊勢物語』と、冊数、丁数ちゆうすう、行数、字配り、挿絵の位置、など、その形態がほぼ一致しており、挿絵を含めた本全体が『伊勢物語』のパロディとなっています。このことは、『仁勢物語』におけるパロディの徹底ぶりがうかがえると同時に、いかに『伊勢物語』が江戸時代のベストセラーであり、当時の読者にとって身近であったのがわかります。言い換えれば、『伊勢物語』の知識を前提としなければ、読者は『仁勢物語』を楽しめないということです。そのことを本課題や『伊勢物語』との比較を通して味わってほしいと思います。

詳細は「くずし字による古典教育の試み（6）―オンライン授業で学ぶ『伊勢物語』から『仁勢物語』へ―」（203頁に書誌を記載）をご参照ください。

底本は国文学研究資料館鉄心斎てつしんさい文庫所蔵本
(DOI: 10.20730/200025190 / <https://kotenseki.nii.ac.jp/biblio/200025191/>).



（担当：加藤直志・加藤弓枝・三宅宏幸）